

歴史家の 調弦

上智大学文学部史学科*編

上智大学出版
Sophia University Press



歴史家の
調弦

上智大学文学部史学科*編

SUP
上智大学出版



9784324106709



1920020022006

ISBN978-4-324-10670-9
C0020 ¥2200E

定価(本体2,200円+税)

発売 きょうせい
[5300292-00-000]

人間アウグステイヌスを『告白』から探る

豊田浩志

神学や哲学が、人間の理想の在り方を時代の最先端の知的エリートを通じて追求するのを主務としていたのと異なり、歴史学は、当該時代の構造的制約の中で苦闘する人間の生き様をありのままに見つめる学問である。したがって、後世の記録に残ることができた一握りのエリートを取り上げることでもこと足れりとするのではなく、人口の大半を占め、だが痕跡も残せず消え去っていった名もなき庶民への眼差しを常に視野に入れ、彼らや社会構造のプラス面とマイナス面の両面を冷静に評価する複眼的姿勢を貫かねばならない。そもそも完璧な人間などいやしないのだから。

『告白』や『神の国』の著者で、教科書にも登場するアウグステイヌス(三五四〜四三〇年)は、聖人・教会大博士として大変著名で、そのためややもすると敬仰の対象になってしまい、彼の実像が見失われがちである。研究者がそのお先棒をかついで縮小再生産につとめていなければいいのだが、実際にはどうだろう。ローマ・カトリック教会が教会博士の称号を与えているのは、現在三五名(内、女性四名)を数えるが、その冒頭を飾る東西それぞれの四大教会博士の一人が、アウグステイヌスである(ちなみに他の西の三名は、アンブロシウス、ヒエロニムス、大グレゴリウス)。彼らは古来崇敬を集めていたが、公式にその称号を授けたのは一二九五年のボニファティウス八世だった。さて、旅行者の落とす滞在費に着目し、初めて「聖年」を定め聖都ローマへの巡礼を推奨したのもこの教皇だった。

今から二年ほど前に、出村和彦『アウグステイヌス』が出版された。コンパクトで読みやすい新書で、私はとりわけその終章で、アウグステイヌスの全著作がまとまった形で、当時のローマ司教の座所サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ宮殿内の図書室に所蔵された、という下りからは、不意打ちにも似たインスピレーションを受け取ることができた。折しも、大学で当時の同僚の私市正年教授から、日本アルジェリア協会でアウグステイヌスに関する講演依頼があり、そのためにも現地を一度見たほうがいいという教授のご配慮で、長年待望していたアルジェリアの地を訪れることができた。こうして私は従前の訪問地、北はミラノ、バヴィア、そしてローマ、オステイア、海を渡ってチュニジアのカルタゴに加え、アウグステイヌスゆかりの重要地点をすべて踏破することができた。

ところでここまでお読みになった読者諸氏は「なぜアルジェリアなの」とお思いの方が多いのではないと思う。実はアウグステイヌスは、北アフリカの、現代の国名でアルジェリア出身の、人種的にベルベル系だった。その彼の思想がローマ・カトリック教会の、そして西欧キリスト教の礎石となったのだが(その件の詳細は別の機会に譲る)、そこから思考が逆行して、彼をヨーロッパ人と思いついてしまっている人のなんと多いことか。それはともかく、こうして私は大学教員退職後の最初の一仕事としてアウグステイヌスの『告白』全編の再読に向かうことになった。実に四、五〇年振りの通読だったが、思いがけないほどの収穫に恵まれた。若い時の読み方がいかにステレオタイプに毒され雑だったのか、また原典を精読することの重要性にいまさらながら感じ入った次第である。この小稿ではその成果の一端を紹介しよう。

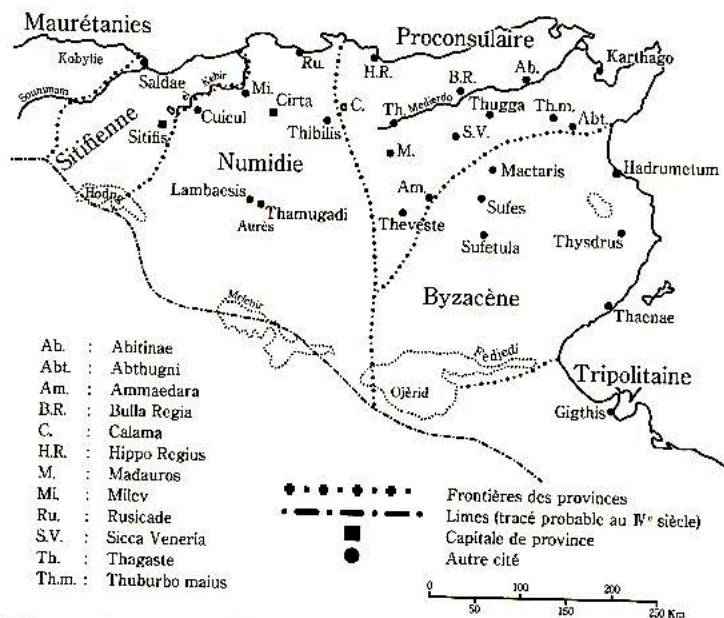


図1 4世紀北アフリカ地図

出典：C. Lepelley, *Aspects de l'Afrique romaine*, Bari, 2001.

一挙に本論に入りたいところだが、彼の出自・家族問題を省略して先に進むことはできない。アウグスティヌス崇敬の影響で微妙な点で研究者の恣意的味付けが顕著だからだ。彼の生地は先に触れたように今日のアルジェリアで、詳しくは海岸線から南に九五キロメートル内陸に入った、標高六〇〇メートルの山間盆地の自治都市 *municipium* のタグASTE (現 *Souk-Ahras*) だった。当時、行政的には帝国屈指の格式を誇るアフリカ・プロコンスラリス州 (州都カルタゴ) に属していたが、西隣りのヌミディア州と境を接した辺境の地で、三〇キロメートル南の学

『告白』は、アウグスティヌスが二九六年(四二歳)にヒッポ・レギウスの司教に就任してすぐに書かれた。彼はその地の前任司教ウアレリウスからの司祭就任要請を五年前に受け入れ、一族・同志とともに生地タグASTEから移住し、翌年補佐司教となっていた。だが彼のこの司祭・司教叙階には、当然のことながら彼の前歴に起因する反対も多かった。それに対する彼なりの対抗的弁明が『告白』だった、ということに研究者が触れることは少ないが、やはり重たく受け止めるべきではなからうか。『告白』から読み取れる範囲で、私は以下のような疑惑を指摘できると思う。

- 1 彼の出自(とりわけ言語)事情
 - 2 彼の放埒な性生活
 - 3 マニ教ネットワークを利用しての立身出世疑惑
 - 4 ミラノでの回心神話の虚実
 - 5 彼の修道生活の隠された現実
 - 6 彼の叙品・叙階における教会法違反疑惑
- 彼が、①正直に自らの弱みをさらけ出している場合もあれば、②事実を多少とも隠匿しようと言葉を濁している場合、さらには、③当時社会常識だったので本人がまったく無自覚に吐露している問題行動もある。また、④研究者が彼を敬仰するあまり手心を加えて指摘を避けている事情も無視できない。この小稿では上記すべてに触れる紙幅はないので、前半を主体に検討してみよう。

術都市マダウロス、もつと南の軍事拠点テウエステヤ、逆に地中海の港町ヒッポ・レギウスへの中継地以上の存在ではなかった。そもそも自治都市とは、ローマ人が占領地に植民して建設したり、その格式が付与された植民都市 *colonia* と異なり、原住の、今の場合ベルベル人を主体とする居住者からなっていた。実際、タガステには、ローマ化の指標とされる闘技場、劇場、競技場、公共浴場など公共建築物の遺構も未確認で、先住のリビア・ベルベル語圏の文化・宗教が強く保存された地域だった。それはとりわけ、多くのベルベル語や、それとラテン語の両方が刻まれたバイリンガルな墓石碑文の出土から明白なのだが (W.H.C. Frend, *A Note on the Berber Background in the Life of Augustine. The Journal of Theological Studies*, 43, 1942, pp. 188-191) 我が国の研究者は、彼の生育環境をローマ的だったとみなすのがお約束となっているようで、その根拠は、父パトリキウスが都市参事会身分 *ordo decurionalis* (都市経費負担と国税徴収の義務を有していた身分。その中から市長や市会議員といった公職者が選任された) で、その先祖はイタリア半島からの植民者だった、ないしローマ市民権を有した退役軍人のはずとの先入観に基づいて、それほどにアウグスティヌスを生粋のローマ人とみなしたい思いが強いわけだが、その可能性は限りなく低い。たしかに、二二年に皇帝カラカラが帝国内の奴隷以外の全自由民にローマ市民権を付与していたので、彼らも当然ローマ人とされてはいた。しかし後期ローマ帝国では、自由民は「上級身分層」*honestiores* と「下級身分層」*humiliores* とに新たに峻別されていて、両者間で法的社会的差別は歴然と存在していた。アウグスティヌスの両親はもちろん後者に属し、あまつさえ辺境住民だったので、生粋のローマ系

からすれば三流市民扱いだっただけである。ともかく自由民といっても下層であれば奴隷とそう違わない苦しい生活水準で、妻を奴隷から求めることもめずらしくない、それが現実だった。

とまれ、父はおそらく小地主層で、癩癩持ちで、気性が荒く、アウグスティヌスが生まれたときすでに四〇歳を越えていて、才気に満ちた息子の学業と身体的成長を単純に喜んでいて、アウグスティヌスが一七、八歳の頃他界している。父について彼は多くを語っていないが、息子の教育費捻出に経済力を越えて尽力したことを (II, 3) 「はるかに裕福な多くの市民たちのなかの誰一人として、子供のためにそのような苦勞はしませんでした」、マイナス・イメージで「彼の野心」と冷たく言い放つ神経には、私はなんだかなという印象を持ってしまふ。

父に比べて息子の評価が異常に高いのは、母モンニカ *Monica* だった。その名前はタガステ近隣ティピリスの女神 *Mon* に由来していたので、彼女は明らかにベルベル系だった。とはいえ生まれながらのキリスト教徒 (IX, 8) で、女召使いに厳しく育てられ、嫁しては夫の癩癩と浮気に悩まされながら「彼女は閨の諸々の不実を耐えた」、キリスト教信仰にすがって外で愚痴ることなく、姑との良好な関係の演出もできる才覚の持ち主だった (IX, 9)。アウグスティヌスは彼女が二三歳のときの子だったので、当時としては彼が長男である可能性は低く、むしろ「おとんぼ」と考える方が合理的だろう。家庭をキリスト教的に営むことで夫に口出しさせず (I, 11)、夫を臨終に際し洗礼に導いてもいる (そして息子アウグスティヌスも)。彼女は、息子一行と故郷へ帰還するためローマの外港オステイアで船待ちしている間に熱病に罹り、五六歳で死亡し遺言でその

地の墓地に葬られた。その遺骨なるものは、一四三〇年にローマ教皇マルティヌス五世によりローマのサン・アゴステイノ教会に移送され、現在に到る（拙稿「聖モンニカ顕彰碑文とオステイア」坂口明・豊田編著『古代ローマの港町』勉誠出版、二〇一七年、二八五―二九六頁）。

母に連れられてアウグスティヌスは幼少期から教会に通っていたが、洗礼は罪の浄めを考えて先延ばしにされていた。これは当時の風潮で、洗礼直後の罪の消滅した状態で天国に行くためだった（この世の終わりが目前と考えられていた初代教会では、幼児洗礼もやっていた。というか、子供を作らないことが二世紀ですら奨励されていた）。この点に関しては父も同感で、それは息子の社会的な立身出世を考慮してのことだった。ユリアヌス帝の反キリスト教政策実施は、三二二―三三年のことで、まだ状況は流動的だったからだ。それがキリスト教にとって好転していくのは、二〇年後あたりからで、アウグスティヌスの回心時期と微妙に同期している件は、先行研究者があまり触れようとしないが、やはり重視すべきだろう。彼の教会通いは彼がマニ教の聴聞者（＝正式の信者）になって中断し母の激怒を買うが、マニ教と距離を置くようになったミラノ時代に再開される。

家族には兄ナウイギウスと、のちにヒッポで女子修道院長となった姉が少なくとも一人いた。親戚には、従兄弟でラルティデアヌス、ルステイクスという初等教育しか受けていない者（『至福の生』I. 6）や、ドナトゥス派に属し裕福で教養あるセウエリヌス（『書簡』52）、それに甥や姪もいた。アウグスティヌスは、アデオグトゥスという明白に非ラテン系の名前の息子（『Deo datus』「神より与えられし者」= *Tatanbaal*: MG. Cox. Augustin, Jerome, Tyconius and Lingua Punica

Studia Orientalis, 64, 1988, p. 88: ヌミデア系というよりも、より正確には後述のポエニ＝ヘブライ系というべきか）を、弱冠一八歳でカルタゴ遊学中に同棲した女性から得ていたが、わずか一七歳で早世している。彼は父以上にポエニ語を知っていたようで、おそらくそれが彼の母の出自のなにかを示していた（『教師』44。但し、ポエニ語をめぐる検討は、後述参照）。

同棲相手とは、一五年後に母モンニカの強い勧めがあり、あからさまに持参金目当てで数え年一〇歳の少女と婚約したときに引き裂かれ、彼女は北アフリカに一人で帰って行った。その後の消息は不明だが、アウグスティヌスのここでの立ち振る舞いは実に不甲斐ない。その事情を彼は以下のように述懐している。

IV. 2. 二六、七歳の時「わたしは一人の女性と同棲し始めていましたが、法律で結婚と呼ばれるような間柄ではなくて、深い思慮もなく、ふらついた情熱によって目をつけた相手とでした。それでわたしは、女性は彼女一人にし、彼女に寝床の誠実を *girl friend* つけました」（父との差別化表現?）。

VI. 13. 一四年後、彼のめざましい社会的上昇に伴い、母の強い意向である少女に求婚、法的結婚年齢に二年足らなかつたが、気に入ったので待つことにした（母はいつもしていたように神からの了解を夢の中で得ようと祈るが、神は彼女に何も示さなかつた）。

VI. 15. 同棲相手は「結婚の妨げになるという理由で、わたしから引き離されましたので、彼女に強く結びついていたらわたしの心は引き裂かれ、傷を負い、血を流しました」。再婚はしないと彼女は神

に誓い、息子を残してアフリカに帰って行った。ところがアウグスティヌスのほうは、彼女を見習うことも結婚までの二年も待てずに、別な女性(単数)と関係を持つてしまふ体たらく。

私にいわせれば、両親ともにベルベル系ローマ市民と考えて一向に差し支えない気がする。それをさらに補強するのは、アウグスティヌスをめぐる言語問題である。彼にとってラテン語もギリシア語も第一言語ではなかった。学校で教師に苦しめられながら学び、ラテン語のほうは優れたレベルで修得できたものの、ギリシア語はとうとう身に付かず終わつたはずなのだが、世の研究者のみなさんにとって、あのアウグスティヌスが当時の文化教養學術に必須のギリシア語ができなかつたということはどうしても受け入れがたいようで、さまざまな救済策を提案なさつてきた。それを知れば本人は面はゆく赤面したに違いない。

I. 13 「幼少の頃に教えこまれたギリシア語を嫌つた理由が何であつたのか、わたしには今でもまだ十分に説明出来かねます。というのは、ラテン語は大好きでしたから。もつともそれは、初級の教師たちが教えてくれたラテン語ではなく、「中等教育の」文法家と呼ばれる教師が教えてくれたものでした。読み、書き、教えることを学ばされる初級の学科は、わたしにとりギリシア語全体に劣らず煩わしく、苦渋に満ちたものでした。……」

I. 14 「……思うに、わたしは、ホメロスを学ぶことを強いられたように、ギリシアの子供がウエルギリウスを強いられたとしたら、きっと彼らにとりウエルギリウスは、同じように苦いものと言えましょう……。じつさい、わたしはギリシア語を一言も知りませんでした。そこで、わたしは、ギリシア

語を覚えるために、「初級教師の」残酷な脅迫と懲罰によって、激しく責められました。もちろん、ラテン語も幼少の頃は全く知りませんでした。しかし、恐怖も責め苦もなしに、乳母たちにあやされ、笑う人々からかわれ、遊ぶ人々の歓声にふれ、意識することなしに覚ええました。そのためわたしはラテン語を強制するほどの罰による圧迫なしに学びました。この時、わたしを学びに駆り立てたのは、自分の思いを表そうと欲するわたしの心でした。そして、わたしは、ある言葉を教えてくれる人からではなく、話しかけてくる人の耳に、自分の思っているいろいろなことを伝えたのでした。……」

ラテン語に関するこの最後の箇所をどうとるか分岐点となる。それが事実なら、乳母といえどもラテン語を話していたそんな恵まれた環境で育つたということなのだから。本当にそうだったのだろうか。私には疑問である。アウグスティヌスが故郷で親しく接していた男性名士たち、ロマーニアヌス(彼のバトロン)やアリピウス(盟友で、後のタガステ司教)らはみなラテン語を操ることができたのは事実だ(もちろんアフリカ訛りだつたはずだが)。それはちよつどフランス統治下のアラブ人やベルベル人が必死にフランス語を学んで社会的上昇を試みたのと同じ現象だつた。その中で、アウグスティヌスの父母は、そして兄弟姉妹はどうだつたのか、気になるところだが彼は何も述べていない。

それにしても、彼のギリシア語不得意証言を正面から受けとめたブラウン P. Brown は、憚ることなく次のように断言する。「ギリシア語を学び損ねたアウグスティヌスはまさに後期ローマの教育システムの犠牲者だったのである。彼は、事実上ギリシア語を知らない、古代で唯一のラテン哲

学者になるのである。青年のアウグステイヌスは、かわいそうなくらい貧弱な準備だけで伝統的な哲学者がしたような「知恵の」探求へ取りかかろうとした。教養のあるギリシア人の聴衆ならば、カルタゴの大学からやって来たこのラテン語しか話せない学生を「大馬鹿者」とみなしたことだろ（『アウグステイヌス伝』上、四〇頁）。ブラウンのこの思い切りのよさはすがすがしいし、こうとらえることが、アウグステイヌスの後半生を考える上で決定的重要性を持つことになる。

今は紙幅の関係で概略に止めざるをえないが、彼のカルタゴからローマ、そしてミラノへの目を見張る立身出世は、実はマニ教の強力なネットワークあつてこそだった。当時マニ教は公然活動を禁じられていたが、実際にはキリスト教マニ派の衣の下でむしろ活発に蠢動していて、彼はそのマニ教巻き返し策の一翼を担ってミラノ宮廷に送り込まれたのだ。そのミラノで直面した彼の知的危機の核心がまさに彼のギリシア語能力不足だった。この事情は素直に『告白』を読めば自明で、彼はミラノでは自分が一流として通用しないことを手痛く思い知らされるのである。彼の回心に司教アンブロシウスが大きな影響を与えたとされる言説も、一般に言われているプラスティックにはなく、再起不能の屈辱体験というマイナス面でもとらえ直すべきである。アウグステイヌスに対し司教は親切に対応し、彼の影響でアウグステイヌスはキリスト教に回帰することになった、と牧歌的に表現されるのが常であるが、真相は「司教は多忙でほとんど質問できなかつた、それで主日での説教を聞いて学んだ」（VI, 3）という状態だった。司教からみて、アウグステイヌスは明らかに異端派から送り込まれた活動家だったので、それを知ってからは多忙を理由に接触を避けて当然だった。

そしてまた、司教を中心とした当時のミラノの最先端のキリスト教教養サークルの主要な仕事は、先進文化圏の東方ギリシア語世界の学術や思想をラテン語に翻訳し取り入れる作業にあつた。その点でアウグステイヌスは致命的に遅れをとっていた。要するにギリシア語に堪能なことが大前提で、その点、ギリシア語コンプレックスの彼には最初から入り込む余地はまったくなかつた。しかも、である。彼はなんと、アレクサンドリアのユダヤ人フィロン（前三〇／二〇―後四〇／四五）が旧約聖書解釈に導入していた「比喩的解釈法」も、三世紀以降の知的潮流となって隆盛を誇っていたエジプト出身のプロテイノス（二〇五―二七〇年）らの新プラトン主義はいうまでもなく、キリスト教関係の、四世紀初頭以降同じくエジプトで開花したアントニオスの隠修士的修道運動すら、知らなかつた。それを三〇年前に世に紹介したアレクサンドリアのアタナシオス『聖アントニオス伝』も、すでにラテン語訳されていたのにそれすら知らず、これも当時のミラノの知的水準に彼が決定的に遅れをとっていた証拠だった。

常にトップでなければ気の済まないアグレッシブな彼にとって、この挫折は到底受け入れられるものではなかつた。まさに人生の危機である。その彼が右往左往の挙げ句再起を期して選択したのは、ラテン語だけでも一流であることができる故郷への帰還だった。これが彼の「回心」の核心だったのではとは、今回の読み直しでようやく到った私の確信である。『告白』の中で、模範信者の母を隠れ蓑に多用しつつ、自らの思想遍歴を延々と書いてキリスト教への回帰を読者に強く印象づけてつつ、その実、田舎秀才アウグステイヌスは、ミラノで立ち遅れているもどかしさの中で大きな壁

におつかつていた。ギリシア語ができない自分はここでは一流になれない、しかし真似事であれ一流になりたい、どうすれば……。得意なラテン語がエリートへの証しのアフリカでなら……。こうして、彼はつい最近まで知りもしなかったキリスト教修道生活を手土産に故郷への帰還を決意する。

だからラテン語は彼にとつて自分のアイデンティティの最後の拠り所、砦であった。ミラノ宮廷のラテン弁論術教師の経歴を引っさげて故郷に錦を飾る、しかも隆興の未来がようやく定まり出したキリスト教信仰に公然回帰し、最新情報の修道生活の実践者として。この選択にとり、マニ教人脈の推挙によるミラノ宮廷での教職辞職は必然で、しかし修道的清浄生活そのものはマニ教も決して無縁ではなく、むしろ推奨され先在していて、だがその逸脱した実態は背教者アウグステイヌスによつて後日暴露されていくわけだが（「カトリック教会の道徳」Ⅱ、31、65）、立ち止まって考えてみるに、キリスト教修道生活においても同様の病理現象の発現は今日と同様とうてい免れえなかつたはずであり、だが彼はその現実と直面した時、もはやキリスト教を捨てて別の道を歩もうとはしない。であれば、マニ教の改革者になることも可能だつたはずなのに、そうしなかつた彼の選択基準が奈辺にあつたのかは、やはり仔細に検討されるべきだろう。

先走つた閑話休題は以上で終わろう。ところで奇妙なことに、アウグステイヌスは彼の生来の第一言語だつたはずのリビア・ベルベル語について一言も触れない。この事実には彼の狂おしいまでの自意識が感じられてならない。そこまでして自らをラテン語話者として印象づけたかつたのだから。他方で、アウグステイヌスは諸著作中で「ポエニ語」に二〇回以上言及している。すなわち、

ヒッポ等の地中海沿岸地方の現地人が話している原語を「ポエニ語」と表現しているのだが、しかし、カルタゴ支配の崩壊後すでに四世紀以上が経過しているので、彼の発言を根拠に文字通りのフェニキア系言語が北アフリカで生き続けたことは、私にはとうてい信じがたいのだが、どうだろう。第二次世界大戦時以降に発掘された墓石碑文がその根拠に挙げられているけれど、たとえば、我が国の仏教墓地での梵字使用を想起するなら、葬送儀礼で記号的呪文的に生き残つていたとして、それが墓石を打刻させた人びとの日常語だつたことにはしらない。そこで、アウグステイヌスは実際に話されていたもう一つの現地語（リビア・ベルベル語）を「ポエニ語」と意図的に表現していた、というのはセム語に属すフェニキア語は、旧約聖書が背かれたヘブライ語と同根だつたので、彼はポエニ語に事寄せて、都市領域外で話されていた土着語（しかしてその実態はリビア・ベルベル語系方言）にキリスト教徒として最大の敬意を表し、すなわちここでは北アフリカ人の矜持を表明すべくそう表現していたのだ、という仮説のほうがより説得的に思えるのだが、どうだろう（cf. J.N. Adams, *Bilingualism and the Latin Language* Cambridge UP, 2005, p. 238; もまろん異論参照）。F. Millar, *Local Cultures in the Roman Empire: Punic and Latin in Roman Africa*, *Journal of Roman Studies* 38, 1968, pp. 126-134。いずれにせよ、「神の国」XVI、7の末尾で「実際、アフリカでも、多くの野蛮な民族が一つの言語で話しているのを私たちは知っている」（傍点筆者）と述べる時、彼ははたしてどの言語を頭に乗かべていたというのであろうか。

さて少年期の彼は、大人の期待にこたえつつ、かなりやんちゃで傲慢だったようだ。そして人から賞賛を受けることに無上の喜びを感じ、非難に対しては三倍返し四倍返しで報復する攻撃的性格を涵養して成長していく。以下引用の最後の一文はとりわけ示唆的なので味読されたい。

I. 9-10 「この世で功をなし、人間の名譽と虚偽の富の獲得に役立つお喋りの術に *ambrosius* 秀でよ、と忠告する人々に従うことこそ、正しい生き方である、と期待された」が、遊びにかけ、学校での管打ち怖さに勉強し、管打たれませんでしたようにと神に祈った。学業の出来はよく「わたしは諸競技では傲慢な勝利を、そして虚偽の物語で私の両耳をくすぐられるのを愛した」た。

I. 19-20 「わたしは数えきれないほどの嘘をつき、「子供を学校に連れて行く」養育係奴隷と学校を得るためにしたこともあった。「遊びにおいて、自分が優越したい、という空しい欲望に負かされながら、しばしばいかさまによる勝利を得ようとした」。しかし他人がいかさまをしたら激しく非難し、それなのに自分が見破られてもそれを認めようとせず、かえって激怒して反発した。「これは子供の無邪気さなのか、そうではありません。年齢が上がると対象は変わるが、実質はまったく同じことなのです」。

またアウグスティヌスは、青年期に彼を襲った情欲の嵐をも隠し立てすることなく率直に表明している。そこに微妙な表現が埋め込まれていることに今回私は気づい(てしまつ)た。その文言を

そのまま辿ってみよう。

II. 1 「わたしはかつて青年時代に、下劣な思いを満たそうと燃え立ち、多くの汚らわしい愛欲のなかで、荒れずさんでいきました」。

2 「愛すること、愛されること、これ以外にわたしを喜ばせたものがあつたでしょうか。しかし、わたしは魂から魂へという明るい友情の正道を保ちえず、しかも、どす黒い肉の欲望と思春期の発する霧が渦巻き、わたしの心を覆い曇らせたため、愛の明るさと情欲の暗さを区別出来なくなりました。この二つが入り乱れ、揺れ動き、脆弱な若者の心を奪ひ、欲望に引き裂き、恥ずべき醜行の渦の中に沈めていったのです。しかるべき指導を得ていれば普通に生きて結婚できたのに、「身内の者は墮落していくわたしを、結婚によって抑制しようとは配慮せずに、わたしがよりうまく言い回す術を習得し、討論で説得出来るようになること、ただそれだけに気を遣っていました」。

II. 3 「16歳のとき、家庭のやむを得ない事情から全ての「学業を休み、両親と暮らし始めたころ、「情欲の茨がわたしの頭上に生い繁」つたが、誰も摘み取ってくれなかった。母は彼の素行を「たいそう心配して、淫行はしないように、とりわけ人妻との姦淫はいけません、とわたしを密かに諫めたことを、覚えています。これはわたしには女々しい忠告とうつり、従うことは恥ずかしいと思われませんでした」。

III. 1 「愛し愛されることはわたしにとり、愛するひとの身体をも享受出来る場合、一層甘美で、楽しみが増えました。それ故、わたしは、友情の絆を卑しい肉慾で汚し、その輝きを地獄のような深い情欲の間で、蔽いました」。

さて、みなさんはこれらをお読みいただきどのような印象をお持ちになるだろうか。すでに紙幅を越えているので引用は控えるが、IV、417やIV、819にもそれらしい記述が残されている。イタリアのかつての新カトリック派の旗手G・バビーニ(四三頁)は、「ここでかれは、偽らない、しかも明瞭な言葉をもって、友情の墮落、肉慾にまで墮落した友情、肉慾と合體した友情に就いて、暗示しているのである。かれが友情に就いて語る時は、きまりきって婦人を意味してはいなかった。また當時は、現行行われているごとく、戀人に對して友だちという言葉は使わなかった。アウグスチヌスが友だちとさえいえば、必ず男の友だちを意味しているのである」と喝破している。すなわち古代ローマ時代においては別に珍しくもなかったことだが、ここで彼は自らがバイセクシユアル(両刀遣い)だったと明白にカミング・アウトしている、としか読めないはずなのである…。

実はこの件は、これまでも西欧の有識者にはよく知られていたようで、同性愛者たちは彼を自分の仲間と(多分に揶揄的に)称していることもあり、敬仰側はそれを否定するのに大わらわの体だが、我が国の研究者がずっと伏せてきた一件である。だが、私が偶然に知り得たバビーニの邦訳はすでに一九三〇年に出ているし、戦後改めてカトリック系出版社から再刊されてもいて、それなりの有識者であればよもや知らないはずはない。古説がすべて時代遅れで、最新刊がいつも斬新というわけではない実例である。真に貴重な先行研究探索の重要性を再確認して、この小稿を一旦終える。

いずれにせよ、故郷北アフリカに帰還後死亡するまでの四〇年間、彼は二度と再びイタリア本土に足を踏み入れることはなく、必要な場合は刎頸の友アスピウスを送っていた。北アフリカを自らの活動の場と意固地なまでに自己限定した振る舞い、と私には思えてならない。

【参考文献】

- ・アウグスティヌス(宮谷宣史訳)『告白録』教文館、二〇一二年(本稿で基本的に依拠、但し一部改訳)
- ・バビーニ(寺尾純吉訳)『聖オーガスチン』アルス、一九三〇／バビーニ(五十嵐仁訳)『聖アウグスチヌス』中央出版社、一九四七年[Giovanni Papini, Sant' Agostino, Vallecchi Editore, Firenze, 1929]
- ・A・アマン(都丸恭子・印出忠夫訳)『アウグスティヌス時代の日常生活』LITHON、二〇〇一年(原著1971)
- ・P・ブラウン(出村和彦訳)『アウグスティヌス伝』上・下、教文館、二〇〇四年(原著1967, 2000)
- ・宮谷宣史『アウグスティヌス』講談社学術文庫、二〇〇四年(初版一九八一年)
- ・出村和彦『アウグスティヌス「心」の哲学者』岩波新書、二〇一七年